

ある日、ラヘルは

たひびとが おおぜい 働きあする やどやの主人の
様ごりだらけの ありばたで

ちいさな 猫の おおを ひろいました。

なんともいえない きれいな ひびきです。

やどやの おきやくさんが 知りましたでしょうか。

ラヘルが たずねても、おんを しらないと くびをふるばかり。

まちはずれに ずんでいる おばあさんに みると、

おばあさんは おおのぬに

じっと おおを かたむけてからいきました。

「これは とくべつを おおだよ。この おおは

なにを、とくべつを ことが おおるときまで

だいに もっていきなり、きつと、おんたが このおおを

よろこんで あげたくなるよ。

とても かわいことが おおるよ」

「それって、どんなとき？」と、ラヘルは おおきを めを

くりくりさせながら ききました。「いつおおるの？」

おばあさんは、かたを すくめて こたえます。

「わたしは しらない。かみきだけがおおんじのこと」

ラヘルは だいに たからものほほよりに

ちいさな おおを じいんの まくらのしたに おきました。

